



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

ウィリアム・ド・モーガンの 幸せなものづくり

vol. **17** | 季刊 **秋**
2010





[特集]

William De Morgan ウィリアム・ド・モーガンの 幸せなものづくり

大量生産のもと、機械に頼った非人間的な労働に対する不満が高まっていた19世紀後半のイギリス。そして生まれた「アーツ・アンド・クラフツ運動*」。ウィリアム・ド・モーガンはそれを担う芸術家でしたが、ものづくりに対する姿勢には独特のものがありました。「化学者」とも「技術者」とも「夢想家」とも呼ばれたド・モーガンのものづくりとは――。

顔写真: ウィリアム・ド・モーガン
(バックタイルとともにド・モーガン財団蔵 photo © De Morgan Foundation)

*商業主義・工業主義社会を批判し、中世のギルド(同職人組合)を手本に、生活と労働の質が確保された社会、ものづくりにおいては手工芸の美を取り戻そうとする動き。ジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの思想や制作活動から発展。

[特集] ウィリアム・ド・モーガンの 幸せなものづくり

02 寄稿 吉村典子さん

LIVE SCHEDULE

- 06 これからの催し
企画展 19世紀の幸せなものづくり
ウィリアム・ド・モーガンがタイルに残したメッセージ
イベント 過去への感謝。未来への希望。
陶と灯の日 ほか

LIVE REPORT

- 07 開催報告
夏休み企画 「地球と生命を考える」体験教室
特別講演会 宇宙飛行士・秋山豊寛氏による
「宇宙から見た地球、土から見た生命」
08 光るどろだんご大会2010
ミュージアムでビアガーデン!
みんなでどろ遊び どろんこ広場で遊ぼう!
09 2010 やきもの新感覚シリーズ
フォトコンテスト2010 「私の好きなライブミュージアム」
入賞・入選作品決定

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol.17 季刊 秋
2010

表紙写真

一枚、一枚、タイルをゆっくり鑑賞する親子連れ。この日は、関西から訪れたお母様と久しぶりに三世代で夏休みの小旅行。夏の思い出を刻むライブミュージアムでした。
(2010.8.7)

撮影: 村山直章



南康土の光るどろだんご

常滑から※

16

幻の光るどろだんご



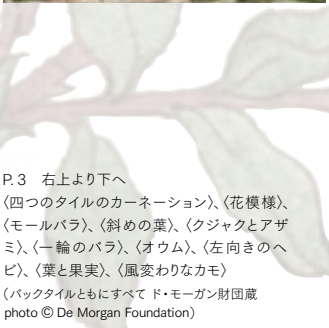
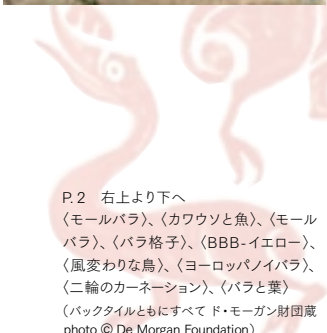
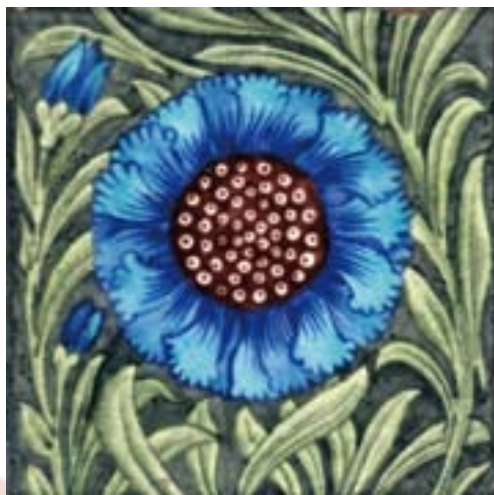
宜興紫泥のどろだんご

土・どろんご館で人気の体験教室が中国に上陸した。上海万博日本産業館のステージで8月3日から8日、INAXウィークのイベントとして、つくり方と道具は常滑から持ち込んだが、材料である土は中国のものにこだわり、化粧泥の発色が良い景德鎮付近の「南康土」を用いた。ものづくりの楽しさは中国の人々にも受け入れられ大盛況だった。光るどろだんごの中国語訳をいにするか、いろいろ案が出たが、「龍珠(中国語読み: ロンジュ)」に決まった。ネーミングとステージに並んだ色とりどりの見本で、来場者は興味津々。もともと、中国の人は珠・玉好きのようである。

材料の土を選んだため、3月に蘇州の工場に行った。つくりやすさでは宜興の紫泥が一番であった。宜興と言えば急須の街、明治11年清国の金士恒がその技法を常滑に伝えている。「常滑から中国に行つてつくるどろだんごの材料はこれだ!」と思ったが、鉄分が多く化粧泥の発色が悪いことから却下となった。

磯村司 (土・どろんご館)

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



P.2 右上より下へ
 〈モールバラ〉、〈カワウソと魚〉、〈モール
 バラ〉、〈バラ格子〉、〈BBB-イエロー〉、
 〈風変わりな鳥〉、〈ヨーロッパノイバラ〉、
 〈二輪のカーネーション〉、〈バラと葉〉
 (バックタイルともにすべてド・モーガン財団蔵
 photo © De Morgan Foundation)

P.3 右上より下へ
 〈四つのタイルのカーネーション〉、〈花模様〉、
 〈モールバラ〉、〈斜めの葉〉、〈ジャックとアザ
 ミ〉、〈一輪のバラ〉、〈オウム〉、〈左向きのへ
 ビ〉、〈葉と果実〉、〈風変わりなカモ〉
 (バックタイルともにすべてド・モーガン財団蔵
 photo © De Morgan Foundation)

ヴィクトリア女王の時代(1837-1901)、イギリスでは
 タイル文化が華やいだ。「ヴィクトリアン・タイル」の時代だ。
 幕開けは、大手製陶会社シントンらが長く途絶えていた中世
 のタイルを再現したことにあり、やがて粉末圧縮法*の導入に
 より大量生産の時代を迎える。それとほぼ同じ頃、素地づく
 りから、成形、装飾、焼成にいたるまで手工芸的方法を用い、
 さらにそのための機材や窯も独自の方法でつくりあげた製作
 所があった。ウィリアム・ド・モーガンの工房だ。



ユーモアがあって温厚、化学好き、実験好き――

「背が高く、ほっそりとした男……。彼の広い額は才能を、グ
 レーの瞳は優しさを、繊細な鼻は品格を、顎は力強さを表し
 ていた。そして最も人を惹きつけたのは、まがいがいなく彼のユ
 ーモアだった」(画家W・B・リッチモンド)。

画家を志し、ロイヤル・アカデミーに入ってきた頃のド・モ
 ーガンを回想したものである。やや猫背で、声は甲高く、口
 数はあまり多くはないが話は機知に富み、温厚な人柄であっ
 たことも、彼を回顧する誰もが語るところであった。

ド・モーガンははじめ画家をめざし、やがてステンド・グラ
 ス制作、そして製陶の道へと進んでいった。この転向は、絵画
 制作への挫折からではない。表現活動が続ける中で、絵の具
 と筆以外の表現に心が動いたのだ。それは、物質の組み合わせ
 や炎の力との関係で変化し形成される媒体、また、その仕
 組みをつくり上げていくことであった。彼の化学好き、実験好
 き、そして、好奇心に火がついたのだ。

モリスとの出会い――
 ステンド・グラス制作とラスタール彩の再現へ

その始まりは1863年のウィリアム・モリスとの出会いか
 らといつてよいだろう。出会った頃のモリスは、すでに「絵画・
 装飾彫刻、家具・金工の美術職人集団」モリス・マーシャル・
 フォークナー商会」を設立していた。ド・モーガンはそこでス
 テンド・グラスの制作を始めたわけであるが、やがて、物質の
 変化からあらわれる輝きが、9世紀頃から発達したイスラー
 ム陶器やルネサンス期のマヨリカ陶器に使用されながら、長
 く製法が途絶えていたラスタール彩と重なり合い、その再現を
 めざすようになる。そして自宅に「窯」をつくり、ステンド・
 グラスの制作とともにラスタール彩再現への実験を始めるので
 ある。その「窯」とは、自室の暖炉を利用して、その煙突に繋
 げるという構造だ。

「火事になるわよ」と忠告したのは上階に住む女流画家ロ
 ーラ・ハートフォードであったが、敬意をもって、また、微笑ま
 しく見守るなかでの言葉であったことは、同じく住人である友人の
 ホレイショウ・ルーカスが当時のド・モーガンに感じていた言
 葉からもわかる――「彼はいつか凄いヤツになる」。

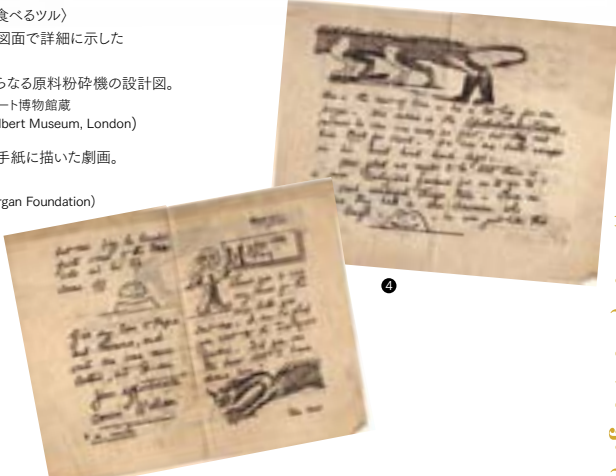
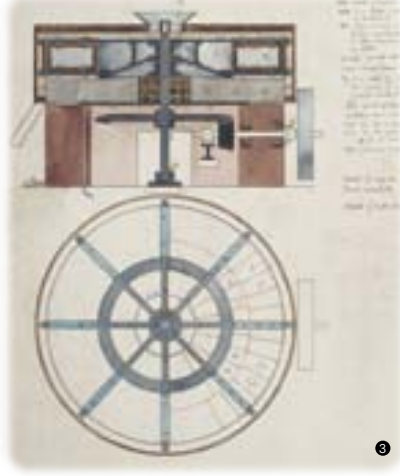
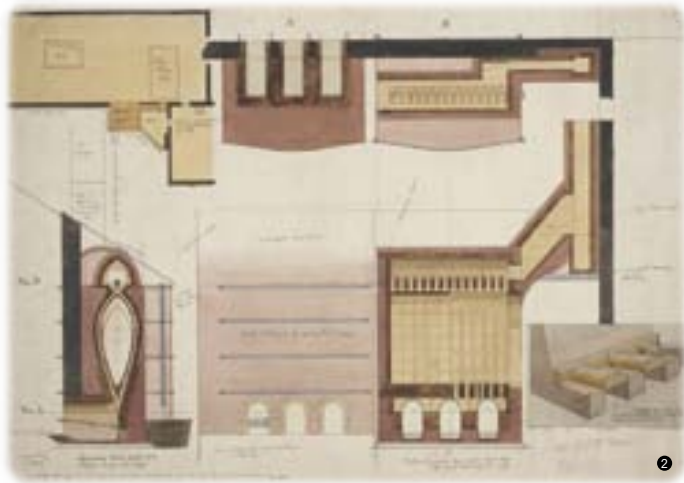
製陶工房設立
 正直で純真な、ド・モーガンの「ものづくり」

やはり火事になった。屋根が焼け焦げたとのことだが、しか
 し、それがきっかけとなり、また、この頃には陶装飾への技術も
 安定してきたこともあり、1872年に自らの工房をロンドン
 のチェルシーに設立する。以降、スタッフを雇い入れ、施設を拡
 充させながら、1882年にマートン・アビーへ、1888年には
 フラムへと移転し、35年間、ド・モーガンの製陶活動は続く。
 制作はド・モーガンの監督下で進められ、仕上げの念入りで
 厳しい確認はあったが、工房は常に和やかな雰囲気であった。
 工房には多くの友人も訪ねてきた。「ビル!(ド・モーガンの
 こじ)」と叫んで入ってきては、ド・モーガンの部屋に向かっ
 て階段を一気に駆け上がるのはモリスだ。モリスは、自分の活
 動のこと等をよく話にきていた。熱いモリスと温厚なド・モ
 ーガンという構図だ。また、モリスは、ド・モーガンの工房で気
 に入った作品を見つけると、よく持って帰ったという。ド・モ
 ーガンは無頓着であったようだが、スタッフたちは気が気でな
 く、よい作品ができることモリスの目につかないところに隠して

*粉末状の粘土を圧縮して素地をつくるもので、粘土を水で捏ねてつくる従来の方法と比べ
 て瞬時に成形でき乾燥時間も省け、生産を促進させるものであった。



① ドローイング(鳥、ワニ、ミミズを食べるツル)
 ② 外観、配置図、断面図を一枚の図面で詳細に示した新しい窯の設計図。
 ③ 花崗岩のブロックと回転部材からなる原料粉砕機の設計図。(上記すべて ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵 photo © V&A Images/Victoria and Albert Museum, London)
 ④ ド・モーガンが幼い従兄弟への手紙に描いた劇画。1877年3月の日付入り (ド・モーガン財団蔵 photo © De Morgan Foundation)



⑤ ラスター彩花器 (グロテスク様式のけもの)
 ⑥ 組絵タイル (モールバラ)
 ⑦ 錫釉組絵タイル (カーネーションの花瓶)
 ⑧ ラスター彩皿 (ガレオン船) (上記すべて ド・モーガン財団蔵 photo © De Morgan Foundation, Credit: Graham Diprose)
 ⑨ レイトン・ハウス(ロンドン) (撮影: 梶原敬英)



おくこともあったようだ。
 そんなド・モーガンであったから商才に長けていたとは言えない。タイルを求めにやってきた客に、目的によってはミントンのタイルを薦めることもあったという。「正直な」商売だ。しかし、彼の正直さ、あるいは、純真さは、何よりも「ものづくり」にあったことは、実作品に加え、残されたスケッチ、図案、原画、設計図を見るとよくわかる。

機材や窯の複雑な構造は、経験の中で生まれた理想の集積

ド・モーガンの文様の原画は、迷いのない筆さばきで、力強く生き生きと描かれている。モティーフは、例えば、鳥の羽根が葉になり蔓になり、彼の豊かな想像力で次々と変容していく。タイルという四角の枠の中に収めなければならぬことも、それがかえって誇張や変形を大胆にし、制約をむしろ楽しんでいくように見える。想像力に富んだ図案家だ。

彼を知る多くの人は彼のことを「化学者」とも呼んだ。釉薬の開発、顔料の調査、そしてそれらが炎の中で変容し、独特の輝きや色の深みと化す効果。絶え間ない実験の中で完成されたものだ。当時のどのメイカーのタイルよりも艶やかで色に深みがあり、定着が安定している。

ド・モーガンの才能は製品に見られるだけではない。ド・モーガンによる製陶用の機材や窯の設計図が現存しており、これらを見ると所謂「技術屋」としてのド・モーガンがくっきり浮かび上がる。その複雑な構造に現在の技術者が疑問に思う部分もあるようだが、その「複雑さ」は、自宅で実験的に窯をつくっていた頃から、試行錯誤を重ね、土の選定から分別、調合、成形、装飾、焼成にいたるまでの、制作技術上の経験の中で生まれた、彼なりの理想の集積であることは間違いない。

フラム時代、自宅から工房へは自転車通っていた。そのギアづくりのこだわりも、友人の多くが知るところであった。メカニズムに対する熱狂は、彼にとってはごく自然のことであったのだ。

「創造以外に、人生を心地よくするものを僕は知らない。」

こうした彼の制作活動を見ると(ド・モーガンは)機械工、化学者、技術者、デザイナー」と言ったフラム時代の共同経営者で建築家のホールセイ・リカードの言葉は的を射ている。多才ということだけでなく、そのどれにおいても徹底した探究がなされており、また、そのどれにも当てはまりながら、そのどれも突き抜けていく豊かで奔放な想像力が彼の中にある。

ものづくりの姿勢が熱く議論された19世紀のイギリス。そして「アーツ・アンド・クラフツ運動」が展開し、ド・モーガンもその関連組織に加わっていたものの、モリスのようにものづくりを通して社会を改善していくとする強い意識や啓蒙的な活動はド・モーガンにはあまり見られない。「モリスは改革者で、ド・モーガンは夢想家」とも言われた。ド・モーガンの制作スタイルは、彼の強い制作理念のもとにあったというよりは、彼の創造の世界を自由に押し広げた結果である。そうであるから、無理な辻褃合わせがない。彼は「happy-go-lucky」つまり、成り行き任せの楽道家とも当時言われた。それはマートン・アビーからフラムに工房を移した時の彼の言葉にもよく表れている——「マートンでは」はじめ地下室をつくった。地下室にしては素晴らしくよくできたので、階を増やすことにした。それもまたよくできたので、更に上階を足していった。その繰り返しでついには摩天楼になり、目的に合わないものとなったので、移動することにした」。移転の理由は持病と通勤の問題にあったにせよ、彼の創造の世界が積み上げられていたのは確かであり、彼のユーモアのセンスがこのように語らせたのであろう。

彼は晩年、小説家としての才も発揮するが、その代表作『ジョゼフ・ヴァンス』の中には「こんなにくだりがある——「創造以外に、人生を心地よくするものを僕は知らない」。ド・モーガンのものづくりまさに「幸せなものづくり」なのだ。

吉村典子 (よしむら のこ) 愛知県生まれ。京都工芸繊維大学大学院博士課程修了、学術博士。デザイン史、工芸史専攻。2009年から1年間、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館客員研究員としてウィリアム・ド・モーガンを研究。